

東京新聞

◆中日新聞東京本社
東京都千代田区内幸町二丁目1番4号
〒100-8505 電話 03(6910)2211

武智鉄二という藝術

森 彰英 著
(水曜社・2940円)



もり・あきひで 著
フリーライター。著書に「ディスカバー・ジャパン」の時代「行動する異端—秦豊吉と丸木砂土」など。

武智鉄二の生涯は、凡人には理解しがたい矛盾に満ちている。社会的な位置付けは「伝統芸能の保護者・創造者」と「ポルノ映画監督の巨匠」に分かれる。著者はこの矛盾を無理に統合し、結論を求めることはしない。あるがままに引き受ける視点に立つ。しかも伝統芸能が上で、ポルノが下などといった価値判断を持ち込まない。

とき見え隠れする気になる存在である」とする。著者の偽りある気持ちであらう。

伝統芸能に携わる評者にとつては、武智は常に脳裏から去らない偉大な達成者である。とりわけ昭和二十四年から二十七年まで、既に伝説となつた「武智歌舞伎」の演出者として名高く、当時、上方歌舞伎の若手花形であった坂田藤十郎や今年亡くなった中村富十郎を育てた。この二人は、功なり名を遂げた後も武智の影響を隠すどころか感謝の言葉を繰り返し語つた。そこには二つの面が

「没後二十年を超えたというのに、武智鉄二という存在は人びとの記憶からまったく消滅したわけではない」。不滅であるとかいふよりも「とき

二つの個性をあるがままに

ある。資産家の息子として生まれ、藤十郎らに最高の教育を無償で与えたこと、文楽への深い造詣を背景として歌舞伎の革新を行い、演出、評論を展開したことだ。

本書は、こうした世間的な評価を得る以前の武智の姿をまず明らかにする。とりわけ徳島県麻植郡(現吉野川市)を訪ねての調査は圧巻である。父・正次郎の経歴が、鉄二に深い影響を与えたことがよくわかる。

見過ごされがちなオペラとの関わりを探索したのも手柄だが、「奇妙な裁判劇」と題した草も、国家権力に論争を挑む武智がうかがえる。監督した映画『黒い雪』の公開後にわいせつ文書凶画公然陳列の疑いで書類送検され、その後の公判の折、被告人尋問を受ける姿を活写する。深いところで著者が武智と共振していることが伝わってくる。

評者 長谷部 浩

(東京芸術大教授)